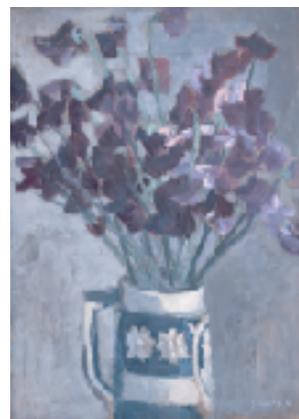


## 田村一男の眼差し - 2 -

田村一男（1904～97年）は、信州の山々に親しみ、日本の大地を愛した画家です。20歳を過ぎて訪れた蓼科高原の雄大な景色に魅せられ、生涯を通じて日本の高原風景を主題としてきました。とくに田村は、毎年のように信州を訪れ、信州の風景を題材にした作品を数多く残しています。こうした高原風景には、田村が自身の肌で感じた自然の厳しさと大地のぬくもりがそこはかとなく漂います。

今回の展示では、70年余りにわたる田村の画業から、四つの題材を選んでご紹介します。まず一つ目は身近で愛でた「花のある空間」、二つ目は日本の冬の厳しさを感じさせる「蔵王」、三つ目は初期から晩年まで幾度となく画題となった「蓼科山」、そして四つ目は「秋」です。田村の視線で選びとった日本の風景を、作品を通じてお楽しみいただければ幸いです。



上) 「蓼科山」より《冬の丘》(1988年)  
上中) 「蔵王」より《蔵王》(1984年)  
上右) 「花のある空間」より《スイートピー》(昭和初期)  
右) 「秋」より《袋田の丘》(1990年)

